

組合士 アラカルト

名古屋市中中央卸売市場
青果卸売協同組合

参事 中村 肇さん

組合運営のゴールドドライバー登場

組合に携わって40年

中村肇さんは、名古屋市中中央卸売市場青果卸売協同組合（以下、青果卸売組合）事務長さらに参事として6代の理事長に任せ、「日々火事場の忙しさ」と自ら言う組合運営の舵取りを続けている。

その組合人生の始まりは、昭和42年、東海6県下のバナナ加工業者で立ち上げた東海バナナ加工商組合で、設立準備から関わり組合設立後は若干32歳の若き事務局長として、当時の「高級果物」の代表選手バナナの輸入から国内での熟成加工、出荷に関わる組合の運営に携わった。在職中の昭和52年には制度発足間もない組合検定試験に挑戦して組合士資格を取得。日頃積み重ねた実務の経験・実績と、それをさらに補い強化する専門知識を持つことを証したのである。そして奉職10年目、その実務経験・実績と豊かな専門知識を買われて、青果卸売組合に「ヘッドハンティング」されたのである。「いずれも組合員は毎日大量のモノとカネを動かす事業者です。そういう人た

ちに向き合うのは、毎日が「真剣勝負」の火事場仕事。火が起これば素早く対応して消す。そんな火事場を奔走し続けた40年ですね」。中村さんは自らの半生を振り返る。

独特な組合・青果卸売組合

青果卸売組合は、昭和30年に青果の仲買人23名で立ち上げた任意組合を前身に、昭和47年、事業協同組合となった歴史ある組合である。組合員数は一時は61名を数えたが、産地の大型化や輸入の増大、大手スーパーや外食産業の拡大に伴う青果小売商の減少等、青果卸売業界を取り巻く環境が大きく変化する中、現在は35名の組合員によって構成されている。その組合事業のいくつかは際だって特徴的である。1つは、組合員の就業環境の向上支援として取り組んでいる事業で、中でも異彩を放つのが食堂の運営である。食堂事業は、運営に苦戦し、撤退する組合が多い事業であるが、当組合では運営当初来、一昨年末まで一切の値上げをしな

かったなど健全経営で健闘している。それは、自動販売機設置収益を還元するなどの工夫を凝らした結果でもある。

しかし、最大かつ特色ある事業は組合員の取引代金決済に関する精算事業である。組合員が行った市場内での取引代金は必ず組合を通じて決済するもので、代金決済、支払保証といった諸制度がある。組合は、これらに基づいて組合員の仕入れ・売上代金の精算業務を一手に引き受けているのである。

この事業には信用が不可欠であるが、組合経験・実績の篤い中村さんの存在が組合員はもとより、取引相手である卸売業者や小売業者からの信頼確保に確実に繋がっている。それは「コミュニケーションを大切にしている」という中村さんが、組合員や、関係する業者との様々な会合や「飲みニケーション」に積極的に参加してきた賜でもある。同時に、「専門知識を獲得し、さらに蓄積し続けている」と、組合士の資格が、皆さんからの強い信頼に繋がっている」と、組合士としての自負も見せる。

組合士だからこの信頼と実績を

代金決済・精算業務は1日当たり4億5億円、年間1000〜1500億円に上り、日曜・祝祭日を除く1年365日繰り返される。しかもミスは許されない。そんな組合の運営は、「忙しいの一言に尽きます。時代の変化に連れ、組合員各社から様々な相談や事故への対応を求められることも多い。しかも、臨機応変さが求められる」と言う。

その激務をこれまで確実に着実にこなしてきた手腕は、ゴールドドライバーにたとえることもできる。「その基礎となっているのが組合士であることと、それを裏打ちしている知識の蓄積」なのだ。その自らの経験と自負から中村さんは、「組合は、事務局自身がレベルアップしていかなければ良くならない。だからこそ、組合士資格取得が組合職員であることの第一歩と位置づけ、挑戦して欲しい」と後進の努力と研鑽を望むと共に、愛知県組合士協会会長として、またベテラン組合士として助力を惜しまないのである。

